

「奈良西大寺展」

西大寺・東京国立博物館

小学館 原色日本の美術9

「中世寺院と鎌倉彫刻」

中央公論社 日本の歴史3

「奈良の都」 青木和夫

講談社学術文庫 「続日本紀(上・

中・下) 全現代語訳」

宇治谷 孟

を参考にしました

吉川弘文館 「奈良朝の政変と道

鏡 (敗者の日本史)」

瀧浪貞子

新人物往来社

「古代女帝のすべて」

武光 誠 編

「私の鎌倉(歴史編)」

粟 光行

### 会員研究

## 血塗られたモンゴル帝国史

真野 信治

はじめに

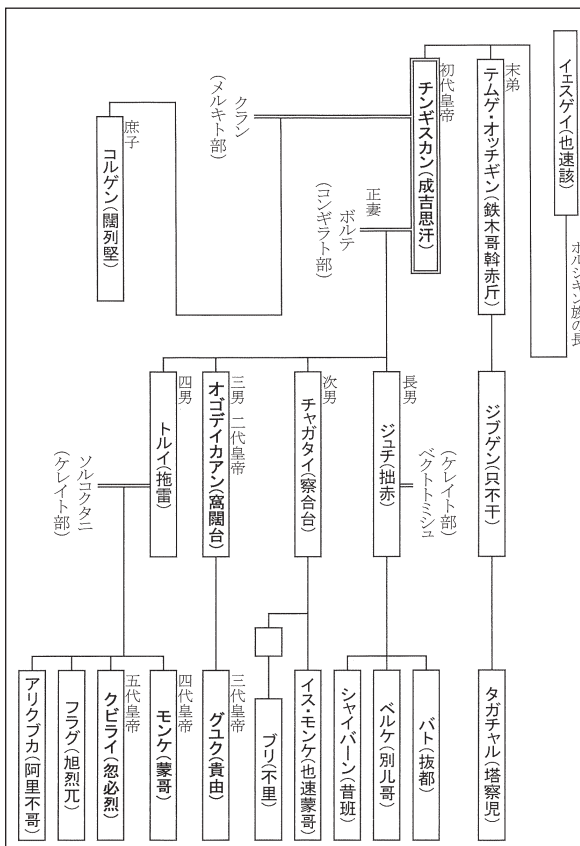
十二世紀北中央アジアに突如として出現し、瞬く間にユーラシア大陸をせつかんしたモンゴル帝国。チンギス・カン(成吉思汗)という不世出の英雄がほぼ一代にて成し遂げ、作り上げた帝国である。チンギスはもとの名をテムジンといい、モンゴル高原に盤踞する遊牧民族の中で、あまりぱっとしないモンゴル部の中のキヤト氏の中のボルジギン族の長イエスゲイ・バートルの子に生まれた。しかし、

彼は天才的な戦略家であり、斬新な軍政を編み出し、非常に統制のとれた戦をする指導者であった。そして、同族のタイチュウト部を皮切りにメルキト族、タタル族、ケレイト王国などを次々と制圧し、

一二〇六年ついにモンゴル高原遊牧民族の王として即位し、チンギス・カンと呼ばれるようになったのは周知のことである。その後、チンギス・カンは東の金帝国討伐、西のホラズム・シャー王国、南の西夏国を滅ぼし、徐々に領土を拡

【チンギス・カン家の略系図(四世代)】

(太字:大モンゴル国皇帝)



大していった。そして、彼の逝去時には東西に渡る広大な地域が遺領として次世代に残されていた。その後、二代目のオゴデイ、およびそれ以後も領土拡大作戦を止めることなく、十三世紀末までにはユーラシア大陸の東西に及ぶ、世界史上で最も広大な領土を持つ帝国となった。かれらはこの国家を「大モンゴル国」(イエケ・モンゴル・ウルス)と呼び、チンギス・カンの血族を「アルタン・ウルク」(黄金の一族)と呼ぶ。本稿は、

チンギス・カン以降、あまり知られていない「血塗られた」政權交替劇のドラマを検証してみようと思う。登場人物が多いので、系図にして一覽できるように施した。

### 一、末子トルイの暗殺疑惑

チンギス・カンには正妻ボルテから生まれた四人の子、長男ジュチ、次男チャガタイ、三男オゴデイ、四男トルイがいる。別に、チンギス晩年に寵愛したクラン妃から生まれたコルゲンがいるが、そ

の他は名前すら伝わっていない。チンギスは生前、親族に対し、軍隊・領地・領民などの分封を決めていた。軍の内訳は、一二九個の千人隊を、四人の子（三人の嫡出子と一人の庶子）と三人の弟に分け与え、残りをすべて末子トルイに相続させた。つまり、トルイは一〇一個もの千人隊を譲り受けたことになる。モンゴル独特の末子相続の一環と見なされるが、このあまりにも大きな差が後々の帝国史に禍根を残してしまったといってもいい。

一方で、生前に後継者として父に指名されたのはオゴデイであった。この後継者の生前指名については、『元朝秘史』にしか記載がないので、信憑性はない。が、多少の裏工作があったのか、チンギス死後のクリルタイでもオゴデイが正式に後継者として指名された。したがって、帝位はオゴデイが継いだ。だが軍事権限はトルイが掌握するという歪んだ政権となつてしまった。

大カアンとなつたオゴデイ（この「カアン」とは「カン」と異なり、オゴデイ本人と彼の「皇帝権」をより明確にするための措置から、

いわば専称であつたと杉山正明氏は説明している）は、早速金帝国討伐の軍を進めることとした。その先鋒となつたのが、強大な軍隊を有するトルイである。トルイは右翼軍を率い、金国の山岳部に攻め入り、寒さと飢えをしのぎながら、一三二二年ついに金国軍主力を三峰山で殲滅させることに成功した。しかし、オゴデイの本軍と合流し、モンゴル本土帰還の途上、不可解な死を遂げた。戦勝後わずか八か月しかたつていない。『元朝秘史』は、病にかかつたオゴデイの身代わりになると言つて呪いのかかつた酒杯を飲み、意識が混濁してみまかつたと伝える。何とも奇妙な話で、「美談」として語り継がれそうである。トルイは、オゴデイ即位の際もある意味「譲り」をし、拳句の果てにオゴデイのために身をなげうつて死んだことになるが、もとより信用できる話ではない。

これは間違いなく暗殺であると思われる。下手人は大カアン・オゴデイ或いは兄のチャガタイ、もしくは叔父のテムゲ・オッチギンもかかわっていた可能性がある。つまり、残つた者の中で得をした

者が犯人という鉄則がここでも生きています。杉山氏も指摘される通り、帝位を継いだオゴデイにとつて、長兄ジュチはすでに亡く、次に目障りなのが前述した通りトルイとその所有する大軍団なのである。これほどの武力を有しているトルイの軍事協力なしには遠征の一つも出来ないことは、オゴデイも痛いほどわかっている。

また、金国討伐の成功でトルイの名声がさらに上がるとますます厄介な存在となり、帝位も危ういかもしれない。実は、長老のチャガタイも軍事力が乏しい実情はオゴデイと同様であり、ここに彼らの利害は一致したと思われる。そしてオッチギンにもトルイを苦境に立たせるよう誘導作戦に参画させ、本国帰還途上というナイスなタイミングで他界させた。しかも大軍団をそのままオゴデイの手に遺したまま。この後の経緯は、歴史が物語っているので多くは語らないが、彼らは十年にわたりオゴデイを中心に、西のチャガタイ・東のオッチギンという三大巨頭体制を謳歌したわけである。

## 二、次男チャガタイの死と長男ジュ

### 子の遺族

黒幕的存在であつたチャガタイであるが、兄ジュチとの確執をはじめ、父チンギスからも嫌われていたことは自ら認識していたらしく、そのため帝位が継げないことも納得していた。しかし権力への執着はあつたらしく、トルイが死ぬことで別の方法で帝国を牛耳ることが出来ると思つていたことは間違いない。それは、弟のオゴデイが凡庸で単なる大酒飲みであつたことを踏まえ、担ぐ神輿はバカで軽い方が良く、強く感じたのだろう。それなので、オゴデイ推挙のために暗躍した可能性は十分ある。そして予定通り、即位後は皇帝の後ろ盾として政権を自在に操つていたと思われ、事実『集史』などはその痕跡を伝える記述がある。

史書は、チャガタイは正義感があり、「ヤサ（法令）の番人」と言わしめるほど、峻厳すぎる法律遵守家であつたと伝えるが、果たしてその評価は正しいのだろうか。杉山氏は、自分の本営から西に広がるモンゴル領の私物化や、国家戦略として取り組んだジャムチ（駅伝）制度の施行を悪用し、い

くつもある自領とオゴデイの宮廷を結ぶジャムチを自領中心に設置するなど、私利私欲に生きた人物と見なしでも過言ではないと言っている。

そんな得意満面のチャガタイであったが、なぜか没年がはっきりしない。史料の記述は妙に曖昧で、オゴデイ死去の直前と記す史料もあれば、直後と記す史料もある。何か記録に残せないような事件が起こった気配が漂う。筆者は、何ら根拠はないのだが、これも暗殺されたと考えている。実は以前よりチャガタイに密かに憎悪を抱いている一派がいた。それがジュチの遺族(主に子の世代)である。ジュチとチャガタイは以前より仲が悪く、後継問題を話し合う場でも激しい口論があったと『元朝秘史』は伝える。喧嘩のきつかけは、以前よりあったジュチ出生疑惑につき、チャガタイがついにそれを口に出してしまつたからである。『元朝秘史』は、チンギスの妻ポルテがメルキト族に拉致された後、族長の弟の妻にされていたことから、ポルテ奪回後すぐに生まれたジュチが果たしてチンギスの実子なのか、と疑念を呈している。

兄に対し「メルキトのてて無し子」とまで罵つたチャガタイに速攻で掴みかかるジュチ。二人を押さえ、引き離そうとする重臣たち。ドラマチックな緊迫した場面を伝えている。父に嫌われていることから間違つても後継者にならないチャガタイの、ついでに気に入らない兄ジュチも引きずり降ろしてやろう、という誠に自分勝手な行動であった。チンギスもすぐにこの疑惑をはつきり否定し、チャガタイを大いに叱責した。さらに折衷案として人畜無害の三男オゴデイをとりあえずの候補とすることでその場を収めた。しかし、これが後の帝国混乱への引き金となつたと史書は言う。ジュチはこの事件後に悶々として樂しまず、自領があるアラル海北方へ去り、父の帰還命令にも従わず、その後寂しく死んでいったとの伝承もあるが、当時の情勢からあり得ない話である。

実は、この一連の出来事は『元朝秘史』以外の史料には無く、はなはだ信憑性に欠くエピソードである。チャガタイがジュチの出生を問題視することはイコール自分の母ポルテの尊厳を著しく損なう

ことでもある。果たして実母の心を傷つけてまでも自分の主張を通すことが出来たのか疑問である。また『集史』は、この疑惑に全く言及しておらず、多分『秘史』作者の創作であろうと先学は一応に指摘している。ただし、当時の状況から推察し、衆人の面前でジュチがチャガタイから何らかの恥辱を受けた可能性は否定できず、その恨みはそのままジュチの子らに引き継がれていったと仮定しても不思議ではない。

そんなわけで、彼らジュチ一家はチャガタイへの復讐のチャンスを狙っていたのである。それが大カアン・オゴデイの崩御であつたと思われる。当時、チャガタイの唯一の庇護者であると言つてもいい弟皇帝がいなくなつたのだから、状況としては良いタイミングである。遠征軍の司令官バトは、オゴデイの死を知らされると全軍をモンゴル本土へ帰還させたと伝わるが、ジュチ一家はそれらに同行せず、特にバトはヴォルガ川河口に腰を据えて全く動かなくなつたと言う。筆者はこの時期にチャガタイを殺つたと見ている。刺客は、果たしてバト本人か、過激な武闘

派の弟シャイバーンか、策略家の弟ベルケか、想像を膨らますしかないが、現実的には刺客の専門家などを雇つて実行に移したとみてもよいだろう。

いずれにせよ、チャガタイの死亡状況が、大物であるにもかかわらず、どの史書にも伝わっていないことから、まともな死でなかつたことは想像に難くない。裏を返せば、帝国にはびこつていた暗殺という常套手段で復讐された可能性を高める余地は十分にある。したがって、史書の沈黙がかえつて傍証になつていると捉えてもいいくらいだ。しかしながら、この仮説は全く根拠がない上に、あたかも小説ネタのごとくで、的外れの妄想かもしれないことを付け加えておく。

### 三、三代皇帝グククの死

先に触れた通り、大カアン・オゴデイ崩御の知らせは、遠征中のバトに四カ月かけてようやく届いた。この時点でグククはバトとの諍いを父オゴデイに咎められ召還命令を受け本国へ帰還途中であり、それにトルイの長子モンケも帯同していた。宮廷のあつたカラコル

ムでは、故オゴデイの第六夫人であるドレゲネが摂政についた。その後、ドレゲネは実子のグユクを何としても帝位に就けさせたく、東奔西走する事となる。そして何度となくクリルタイの開催を即したが、長老のバトが全く反応しない。明らかにグユク推戴に反対していることがわかる。しかしドレゲネの努力が報われ、一四六六年のクリルタイで、バト欠席のままついにグユクは新帝に推挙された。

即位したグユクは、父オゴデイにならない直ちに西への出兵を画策し、早々に出陣していったが、何のための「西征」なのか？よくわからなかった。ここに一人の女性がこの新帝の行動にきな臭さを感じ、西方のバトに気を付けるよう使いを出した。この女性こそ、名をソルコクタニ・ベキ、故トルイの正室であり、モンケ・クビライ等の母でもある。彼女は以前より、夫トルイの急死にあたり、残された軍隊の一部を許可なしに我が子に移管したオゴデイに不信感を抱いており、併せてグユクにも決していい印象を持っていなかった。加えて、ジュチの正妻であるべくトトミシユはソルコクタニの実姉

であり、バトとも密に連絡を取り合っていた可能性は十分ある。「標的は我らだ」とすぐに悟ったバトもついに立った。こうしてモンゴル帝国史上、大軍団同士のしかもモンゴルへのモンゴルの大会戦が始まろうとしていた。

ところが、その直前になんとグユクが急死してしまう。これまた絶妙のタイミングである。在位は二年足らずであった。以前より健康状態に問題があつたらしいグユクではあるが、これこそは間違いなく暗殺であろう。下手人はもちろんバトであると考えたい。チャガタイの時と同様、刺客を放つたものだろうか、とにかく抜け目がない男である。今でいう危機管理が他の王侯よりもしつかりしていとみられる。またそれ以上に、険悪の仲であるグユクの帝位などは決して認められるものではないと強く思っていたに違いない。

#### 四、四代皇帝モンケの死

こうして、モンゴルの同士討ちをすんでのところで回避したバトは、ここから帝国のご意見番として君臨していく。不満分子の反対を押し切り、モンゴル本土以外の

地で開かれたクリルタイで、盟友モンケを大カアンに推挙した。会では、始めにバト自身が推薦されたいが、すんなり謝絶している。本心はわからないが、血なまぐさいモンゴル本土よりも壮大なキプチャク草原を治めることの方に関心があつたのかもしれない。二度のクリルタイを経て、モンケは帝位に就くことが出来たが、バトをはじめとするジュチ一族の強大な軍力がバックになればすんなりとはいかなかったであろう。

即位したモンケは、ここで徹底した血の粛清を行う。つまり、自分の大カアン就任に不満をあらわにしたオゴデイ・チャガタイ家の一部の王侯などに非常に冷酷な仕打ちを行つた。これにより、オゴデイ家ではほとんどの王侯がたたかれ、チャガタイ家も当主イス・モンケ及びブリが殺されるなど大打撃を受けた。どの史書も帝国始まって以来の大粛清と伝え、モンケはここで「モンゴルがモンゴルを殺してはならない」というタブーを犯してしまったといえる。

次にモンケは新たに東西の二大作戦を展開する。一つは「フラグの西征」として有名であるが、問

題は次弟クビライに任せた東方戦線であつた。なかなか進まない戦況に業を煮やしたモンケは果敢にも自ら「南宋親征」を発表し、東方戦線に飛び込んで行つた。ところが、一四九九年四川の戦陣中に疫病にかかり他界してしまう。『集史』は「伝染病にかかった」と記すが、厳密には何であつたかわからない。またしても起こつた微妙なタイミングでの大カアンの死だが、やはり毒殺の可能性は捨てきれない。

まず、弟クビライとの間に確執があつたことは事実らしい。それとこの東方戦線の一方の軍団を率いるタガチャル(テムゲ・オッチギンの嫡孫)のつた最前線での謎の撤退が非常に気になる。なぜ大カアンの意に反して攻撃を止めてしまったのか、史料は何も語らないが、間違いなく処罰されるだろう。ただ、この二人はモンケ政権の南下政策には欠かせない人材であつたがため、話はややこしくなる。一方、このころのクビライはいわゆる「中華かぶれ」と陰口を叩かれるほど中華に肩入れしていた事実があり、あくまでも草原の男でありたいモンケにとつては

胡散臭い弟だと感じていたかもしれない、クビライもそれを察していた。

ここからは推測になるが、モンケの死は、中華官僚に囲まれたクビライのクーデターの一環ではなかったか、との仮説を立てたい。一環とは、モンケを亡き者にし、さらに正統の後継者となりうるアリクブ力をも失脚させるという連続のクーデターであったと考ええる。直接の下手人は密かにモンケに恨みを抱くオゴデイ家関係者かもしれない、クビライの息がかかっていたと見做してもいい。ここにモンケの最期を伝える話がある（信憑性はない）。死の直前、高熱を発し脱水症状に陥っていたモンケに、酒も水分のうちであり薬でもあるからと唆した者がおり、それを信じたモンケがさらに飲酒を続け、死に至ったという伝承である。ひよっとしてこの薬師らしき人物が刺客だったのかもしれないが、少々間抜けな話でもあり俄かに信じがたい。

いずれにせよ、クビライもタガチャルもモンケの親征が成功裏に終われば、確実に干されると予想していた可能性は大いにある。そ

の後のモンケの中華掃討作戦はクビライの思惑をあざ笑うかの如くさらに厳しい殲滅作戦になっていくことも容易に想像ができた。一方で、クビライも他の兄弟同様に大カアンを権力を欲する一面を持つていたと思われる。しかも中華に接することで、来るべき多極的国家の時代をいち早く感じているのかもしれない。そういう意味では、間違いなく旧体制に対するクーデターであったといってもいい。

以上、チンギス・カンに始まるモンゴル帝国の血塗られた政権交代劇を検討してみた。実は、モンゴル王侯の「何となく怪しい死」と感じる事例はまだたくさん伝えられている。それでも史書は多くを語らない。ただその沈黙が「何かがあったのだろう」という事をあえて示唆しているように思えてならない。

【六月に入会したばかりの新参者ですが、さっそく投稿をさせていただきます。誠にありがとうございます。専門は日本史なのですが、今流行りの二刀流を駆使し、世界史にも挑戦してみました。】

#### 参考史書

『元朝秘史』、『元史』、『集史』  
ジュワイニー『世界征服者の歴史』  
ジュリーズジャーニー『ナースイル史話』

#### 参考図書

ドーソン『モンゴル帝国史』一、二  
佐口透編『モンゴル帝国と西洋』  
杉山正明『モンゴル帝国の興亡』  
上下  
杉山正明『大モンゴルの世界』  
杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』  
川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』  
ジャック・ウエザーフォード『パックス・モンゴリカ』  
ロバート・マーシャル『モンゴル帝国の戦い』

【筆者紹介】平成30年6月入会。横浜市青葉区在住。日本家系図学会理事（監事）。趣味は全国の埋もれた系図の探求と体を動かすこと。但し、ゴルフ・ウインドサーフインは中断中。本会入会の動機は「歴研よこはま」の会員研究の題材に非常に興味が沸いたからとのことです。

